

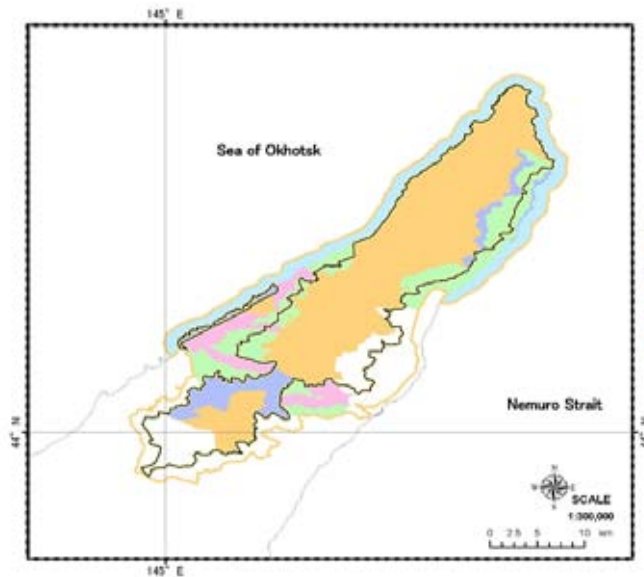
平成 16(2004)年度

知床世界遺産候補地科学委員会

エゾシカワーキンググループ

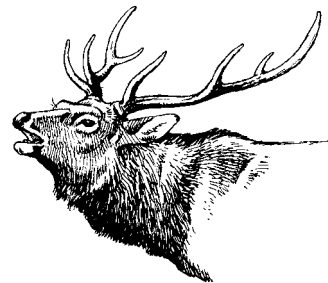
第 1 回会議

議 事 概 要



Nomination site of
the *Shiretoko*
for inscription on the
World Heritage List

Nominated Site
Core Area
Buffer Area
Shiretoko National Park
Special Protection Zone
Class I Special Zone
Class II Special Zone
Class III Special Zone
Ordinary Zone



場 所：羅臼町商工会館 2 階会議室

日 時：平成 16 年 7 月 8 日(木) 10:30 ~ 14:00

会議次第

【1】環境省東北北海道地区自然保護事務所長挨拶

【2】事務局説明

「知床世界自然遺産候補地科学委員会エゾシカ・ワーキンググループの設置について」

【3】運営事務局説明

「知床半島のエゾシカを巡る自然環境の現状」

【4】「自然保護区におけるシカ管理のあり方」についての議論

【5】「各年度の調査計画及び検討作業の進め方」についての議論

配付資料一覧

1：出席者名簿

2：議事次第

3：エゾシカ・ワーキンググループの設置について

4：知床半島におけるエゾシカ保護管理計画の策定について

5：平成 16-18 年度 環境省・知床シカ調査計画案

6：知床半島における現在進行中・実施予定の調査一覧

出席者名簿

エゾシカワーキンググループ 委員		
専修大学北海道短期大学園芸緑地科教授		石川 幸男
北海道環境科学研究センター 道東地区野生生物室長		宇野 裕之
北海道環境科学研究センター主任研究員		梶 光一
財団法人 自然環境研究センター研究主幹		常田 邦彦
横浜国立大学環境情報研究院教授		松田 裕之
(以上50音順)		
知床世界自然遺産候補地科学委員会 委員(オブザーバー)		
北海道大学名誉教授		石城 謙吉
酪農学園大学助教授		金子 正美
NPO法人 北の海の動物センター / 北海道大学		小林 万里
野生鮭研究所		小宮山 英重
北海道立稚内水産試験場長		佐野 満廣
知床世界自然遺産候補地科学委員会 オブザーバー		
斜里町総務環境部環境保全課	環境保全課長	村田 良介
同	自然保護係	村上 隆広
羅臼町環境課	課長補佐	工藤 茂樹
同	自然保護係長	田澤 道広
知床世界自然遺産候補地科学委員会 事務局		
環境省東北海道地区自然保護事務所	所長	渡邊 綱男
同	次長	鳥居 敏男
同	自然保護官	尼子 直輝
同 釧路支所	生態系保全科長	山田 邦夫
同 釧路支所	自然保護官	西野 雄一
同 ウトリ自然保護官事務所	上席自然保護官	遠山 和雄
同 ウトリ自然保護官事務所	自然保護官	田中 準
同 羅臼自然保護官事務所	自然保護官	安藤 弘
同 羅臼自然保護官事務所	自然保護官	岸 秀蔵
北海道森林管理局計画部計画課	課長	安永 正治
同 企画調整部保全調整課	課長	近藤 昌幸
同 計画部	自然遺産保全調整官	小野寺 秀夫

網走南部森林管理署	ウトロ森林官	山 寄 康 司
根釧東部森林管理署	署長	伊 藤 香 里
同	業務課長	山 岸 寛 明
同	羅臼森林官	和 田 隆 太 郎
北海道環境生活部自然環境課	参事	石 川 照 高
同	主幹	西 村 良 伸
同	主幹	高 橋 洋 紀
網走支庁環境生活課	課長	須 藤 進
同	自然環境係長	長 尾 康
根室支庁環境生活課	課長	芳 賀 昭 久
同	自然環境係長	小 畑 淳 毅
環境省自然環境局自然環境計画課	審査官	川 越 久 史
知床世界自然遺産候補地科学委員会 運営事務局		
知床財団	統括研究員	山 中 正 実
同	主任研究員	岡 田 秀 明
同	保護管理研究 係長	小 平 真 佐 夫
同	研究員	藤 原 千 尋

議事概要

凡例 委員は所属を略し、事務局は所属を記した。

会議次第 1 環境省北海道地区自然保護事務所長挨拶

- ・自己紹介
- ・資料確認
- ・座長選出 梶氏を選出
- ・座長挨拶

梶座長 現在何がわかっているのか、わからないことは何かを明確にもらい、共通認識を作ることを第1回目の目的としたい。

会議次第 2 知床世界自然遺産候補地科学委員会エゾシカ・ワーキンググループの設置について

- ・環境省東北海道地区自然保護事務所 鳥居次長
設置の目的について配付資料3を用いて説明
- ・環境省東北海道地区自然保護事務所釧路支所 西野自然保護官
エゾシカ WG の目的、スケジュール等を配付資料4を用いて説明

質疑応答・議論

委員 A 花粉分析のタイムスケールはどのくらいか。

小平（知床財団）数千年、4000～5000年をイメージしている。それで過去のエゾシカの増減を調べる。

鳥居（環境省）エゾシカワーキング（以下、エゾシカ WG と略す）の検討の対象範囲は、世界遺産対象範囲の外との関わりを考えて行かなければならない。国指定鳥獣保護区の外に言及する場合は、北海道との調整が必要だ。H19 から道の第10次鳥獣保護事業計画がスタートするので、この時点で、道のエゾシカ保護管理計画の中にも知床のエゾシカ保護管理計画を位置づけてもらいたい。

高橋（道自然環境課）道のエゾシカ保護管理計画との整合性はまだ図られておらず議論が必要である。

座長 世界遺産候補地の核心部分は国指定鳥獣保護区であり環境省管轄だが、緩衝地域は一般地域も含まれており道の管轄地域もある。そのあたり

の調整は時間がかかるのでまたの議論とする。

委員 B 岬以外の植物の現状は把握されていない。まだ情報を提示できないのに、エゾシカ管理計画が進んでいくのは如何なものか？全域とは言わないが、重要性のある部分での現状調査は必要である。

委員 C 合意形成手法の検討とあるが、例えば地元の意見をどうするのか？科学委員会やエゾシカ WG と地域連絡会議との関わりはどうなっているのか御説明頂きたい。

鳥居（環境省）エゾシカ WG は科学委員会に所属する形である。この場はあくまで科学的な立場からの検討をする。

社会的な検討を含めた対外的説明は、計画作成主体である環境省が地域連絡会議などの場を通じて行う。エゾシカ WG の方から直接説明して頂く場合もあり得るが、その際は別途検討する。

会議次第 3 知床半島のエゾシカを巡る自然環境の現状

・知床財団 小平保護管理研究係長

配付資料 5、6 を用いて説明

質疑応答・議論

委員 A （2005 年から半島全域を対象に行われるシカ採食圧調査では樹木を調べるが）草本も調べないといけないのでは。

小平（知床財団）木本でも 1 年では終わらない。草本も調べると相当な日数が必要となる。

会議次第 4 「自然保護区におけるシカ管理のあり方」についての議論

・知床財団 小平保護管理研究係長

自然保護区におけるシカ管理のあり方について問題提起

質疑応答・議論

座長 世界自然遺産候補地管理計画の主旨は森林生態系保護地域の管理方針と同じでは？

安永（林野庁）確かにそう。人手を加えず、自然の推移に委ねるという方針だ。

座長 現段階で林野庁はシカの影響をどのように把握しているのか、現状認識をご説明下さい。

安永（林野庁）確かにいろいろな植生に影響が出ており、知床岬地区では、ミズナラ

にまで被害が出ている。森林環境に変化が出ているとは認識している。しかし今後、どのようにしてゆくか林野庁のなかで意見はまとめていない。

座長 では、世界自然遺産候補地でエゾシカの管理をどのように考えるかについて意見を頂きたい。

委員 D 今日結論を出す話ではなく、今は協議の始まりで、どういう検討材料があるかを整理すべき段階。例えば、まず世界自然遺産候補地域にかかっている様々な既存の保護制度の方針や目標について一度整理する必要がある。

委員 A いくつか質問がある。知床のシカは現時点で独立した個体群といえるのか。また、一旦絶滅した個体群が回復したことを考えると、過去にも局所絶滅があったのかどうかも重要な情報。また、我々は今のシカの増加を許容できるのか。今ある植生は過去のエゾシカ増加によって減少したあと残存した植生から回復したものなのか。その辺の科学的データが必要。

岡田(知床財団) 質問について全ては答えられない部分がある。独立しているかどうかは部分的にしか把握されていない。岩尾別地区で電波発信機による追跡調査をしたが、この地域では定着的だった。真鯉地区の個体群は主稜線を越えて羅臼側まで移動した。若齢の分散はわずかな例があるが、どれくらいかわからない。過去にも局所絶滅があったかどうかは不明。現在計画中の花粉分析の結果から推測は可能ではないか。こちら花粉分析から検討することになる。

委員 A 局所的に絶滅する前の DNA(シカ)はとれるのか。

座長 遺跡からの出土物での解析を北大グループがしているが、知床でやっているか確認する。

委員 C 半島沿岸沿いの遺跡でシカの骨が出土しているのではないかと？

座長 トビニタイ、チャラセナイなどの遺跡でシカは出ているが残りにくいらしい。

山中(知床財団) かつて斜里側の知床半島海岸線低標高地域にはエゾシカの選好性の高いハルニレ、オヒョウが分布していた。しかし、今は岬には大径木はない。その他の地域も相当減っている。これらのニレ属の樹木が生育してきた期間中は、今ほどシカは高密度な状況では無かったはずである。従って、大径木が生きていたこの約 200 年については、エゾシカ

の激増はなかったと考えられる。

委員 B 花粉分析では、その花粉が何時の時代なのか確認するのだろうが、相対的な順序がわかっても、絶対年代が分からないときもあるのですね？

小平（知床財団）そうです。

委員 A ということは、スケジュール的に 3 年間では、過去のエゾシカの動態が判明しない可能性もある。最低限、どこまでいえるかという見通しがないと研究計画は危うい。「何でこんなに増えたのか？」という質問に我々が答えられないと、提言はできない。

小平（知床財団）今実施中の調査だけでも結果が出るのは 1~2 年先となる。調査の結果を重要な判断材料とすることは無理だ。しかし、この間計画を進めないわけにはいかない。我々の認識としては、調査は管理計画策定後のモニタリング手法の確立に資するものという要素が強い。次にエゾシカの過去の増減について仮説を述べると、全道的に大きく増減を繰り返す大個体群とは別に、成長率の低い小さな個体群が細々と知床にいたのではないだろうか。

委員 A 知床で地域絶滅があった場合、無かった場合では管理計画の認識が違う。どんな自然認識をするかによって管理の方向はガラッと変わる。そのことは目的に関わる。目的を達成するためにどうする・・・ということがなければ合意形成はできない。「自然の推移にまかせる」ともしなれば、合意形成にも関わる。この自然をどう捉えてどうやるのかという部分は、科学的なデータが全て揃わなくても、3 年の間にやらなければならない。方針は数年後に見直しても良いが、一度走り出す必要がある。いくつかの選択肢を念頭に置いて、後で修正が必要となっても対応できる様なものを作っていかなければならない。

座長 イエローストーンでも、ゴールを何処に置くか絵を描くことが重要だった。ここでは白人が渡ってくる前の自然を対象とした。次に先ほど小平（知床財団）氏が絶滅期にも「エゾシカは知床に細々といたのでは」と仮説を述べたが、聞き取り調査によると、シカは一度地域の絶滅により一掃された可能性が高い。

委員 D 管理計画のタイムスパン、時間軸をどのように念頭に置くか。例えば、計画を立てるときに 400 年先を考える必要があるのか。

座長 400 年という長期間の計画に人間側が対応できるかは別として、知床はそのようなことを議論できる場であり、長期的に見守っていくことが出来る貴重な地域である。まずは色々なパターンを描いて、失敗が少

ない様にオプションがあった方がいい。いずれにせよ、誰も正解は分からない。

しかし、現状認識として、先ほどの山中氏の発言にあったように、ハルニレの状況から推察すると過去 100～200 年の間に今の様なシカの過密状態がなかったことは推察でき、それは共通認識となる。

委員 A もう 1 つの論点は、生態系プロセスにシカの動態を入れられるのか、手をつけるとしたら行政としてはどう手をつけるかということがある。知床世界自然遺産の管理計画や森林生態系保護地域の方針からすれば、自然に任せて生態系のプロセスを保全するという事も考えられる。放置すれば今まで知床の自然が体験してなかった影響がシカによって出てくると思う。現状の生物多様性が損なわれる可能性が出てくると思われる。それは防がねばならないと思う。そのためには柵で囲うだけでいいのか。またそれを検証する体制が管理計画の中で作れるのかという疑問がある。個体数管理も大きな選択肢としてあり得る。

オブザーバー A 過去 100 年間では、シカが現状の様にはいなかった可能性が高い。70 年代から増え始めたと解釈した。自分の体験からすれば、根室管内の牧草地の増え方を見ると、1965 年時点と比較すると 1985 年は 3～4 倍に増加している。牧草地の増加とシカの増加は関係あるのでは。

委員 C 金子先生らの調査で、牧草地拡大や林地開発が道東の爆発的増加と関係しているというのは共通認識になっている。それが 1970 年代に入って知床に再分布し、その後増加したと考えられている。

座長 委員 A は積極的な介入が必要としているが、私は違う考え方をしている。岬のデータを見る限り、気象条件によって増加率は抑制されていることが示唆されている。知床はその増減のプロセスを見ることが出来る地域。緊急性の高い植物は柵を作って守りながら、シカの増減も含む生態系プロセスを見守ることが出来る地域と言える。北海道のエゾシカ管理計画でもそうだが、個体数調整をするには相当な覚悟をもって、揺るぎない信念を基に、あらゆる反対に説得材料を持つ覚悟がなければ着手すべきではない。多大な労力がかかる。そうしないと逆に増加率を上げて終わってしまう。

そうした中で、植生とシカについてデータを集めて共通認識を持ち、それに対してどのような対策が一番現実的で効果的なのかということ織り込むのが、この管理計画だと思う。

委員 A シカを捕るのが選択肢の 1 つといったが、今はデータが足りない。この 200 年ではここまでの高密度は無かったらしい。では、多様性をど

う守るのか。守る体制が整っていないのなら、一度密度を下げるのも手だろう。

座長 委員 A がおっしゃったことは予防的措置ということだと理解した。本日は結論を出す場ではなく、シカの管理について、様々な考え方を委員の方に出してもらいたい。

山中（知床財団）座長の発言された、少々の捕獲では増加率を上げてしまうことについて、皆さんに分かる様に説明をしておいた方がよい。

座長 下手に捕獲して密度が下がると、最適状態になり、増加率が上がる。最大に持続的に収穫できる状態になってしまう。減らすなら、徹底的に減らす必要がある。

個体数管理が必要なのはシカが植生に深刻なダメージを与えている場合である。従って、半島全部ではなく、代表的なところでいいから、シカが植生にどのような影響を与えているか知りたい。もう少し判断材料が欲しい。

この議論は会議だけでは議論がしきれないので、メーリングリストで議論する。また、釧路の生態学会で「エコシステムマネジメントとしてのシカ管理」というシンポジウムを開催するので、そこで議論を深めたい。

オブザーバー B シカはかつて道内には高密度にいた。少なくとも局地的にはそれは間違いなく、その後明治期の崩壊もあった。それは事実であっただろう。ハルニレの状態を考えると、知床では過去 100～200 年位は現在の様なシカの増加はなかった。エゾシカの増加の原因としては、戦後の北海道で起こった自然の攪乱が大きかったと思う。農地の規模は早い時点で現状並みになったが、牧草地の拡大は最近のことであり、環境の攪乱がシカの増加の背中を押したのではないか？エゾシカ WG には以下の事項を検討して欲しい。

エゾシカ増加の要因を洗い出す努力をして欲しい。

個体数管理を行うとすれば、シカをどの位の数と期間捕り続けなければならないのか。

世界遺産地域の外の隣接地域で意識的に減少を図った場合、ある程度タイムスケールがあれば遺産地域内に効果が波及してこないか検討して欲しい。

座長 オブザーバー C のグループで開拓以前の原生自然植生の復元をした図

がある。また牧草地などの増加についてもデータは次回示したい。

昼食

会議次第 5 各年度の調査計画及び検討作業の進め方

・知床財団 小平 保護管理研究係長

配付資料 5 を用いて説明

質疑・議論

座長 シカ個体群動態のモニタリング項目の表の中で、継続、新規という仕分けをしているが、新規については新しく予算を組み直すということか。

小平（知床財団）可能であればそうしたい。

座長 予算規模はどの位か。

小平（知床財団）今いくらとははっきり言えない。

越冬群に関する航空センサスについては、ルシヤ地区は知床岬の調査のついでに30分程度時間延長すれば可能と考えられる。遠音別地区までは新たな予算措置がないと航空センサスは不可能。

ライトセンサスは、羅臼地区は幌別・岩尾別地区と同じレベルの調査であれば1回あたり7～8人日で可能であるが、現行予算内では難しい。

死亡個体調査は、ルシヤでは過去に一度やったことがある。遠音別地区については、範囲が広いのでどの程度の範囲でやるかを検討しなければならない。いずれにせよ知床岬以外の地区での死体調査は、既存の調査の枠組みや予算では難しい。

委員 B 植物側についてもシカと同様の広域モニタリングが必要。

小平（知床財団）森林の広域調査は、林野庁の H17 年事業で予定はされているが、実現可能かどうか現時点では未定。関係機関がカードを持ち寄ってどの予算で誰が何をやるのかという整理も必要だと考えている。

座長 予算と実行者の担保が必要である。委員 A に同じく 3 年間かけて検討している屋久島について聞きたい。

委員 A 環境省から頂いている技術推進費で、屋久島以外を含む 3 つの地域をケーススタディとして合計年間数千万円を 3 年間得ている。3 年経ったら長期モニタリング手法を含めて考える。ただ、3 年経った後も同じ予算がでるのは難しそうである。

- 座長 調査研究の体制を予算的にとることができるか大変心配。
- 渡辺（環境省） どんな枠組みで体制的・予算的に確保していくかは鍵だと思う。いま「これだ」という方法があるわけではないが、必要なものは指摘いただきたい。その中で重み付けをして、知床については各行政機関が縦割りを取り払って必要なものを実現していきたい。
- 委員 C 調査計画案に示された季節移動・個体群構造把握は重要。ただ、10月から移動を始める個体が多いので、その時期を考慮すべき。次に越冬群の密度を層別化して、それぞれに草本と木本のモニタリングサイトをきちんとつくることは優先順位が高い。そのためには予算だけでなく、人手も必要。
- 座長 今、現地の調査は知床財団が一手に引き受けているが、予算面や人的体制は大丈夫か。
- 小平（知床財団） 知床財団だけでなく、座長・委員 B・北海学園大の佐藤教授にも関わっていただきたい。
- 座長 林野庁サイドのモニタリング調査などは如何か？
- 近藤（林野庁） 森林生態系保護地域の森林保全に関する調査は、3カ年の継続で予算要求している。それ以外については今日の議論をふまえて検討することになる。
- 座長 緊急性の高い部分について、重複を避けるため環境省と林野庁で仕分けをして実現可能な方法を検討していただきたい。
- 座長 科学委員会委員のオブザーバーの方、何か意見は？
- オブザーバー C 植生図について、1980年に作られた現存植生図はあるが、現時点のものが無い。きちんとした植生図とデータベースが必要。
- 座長 作成する場合どのくらいの労力がかかるのか。
- 委員 B 以前の調査では少なくとも2カ年（夏）集中的に調査に入っている。今は航空写真の解析技術が発展しているので、現地調査は少なくて済む。
- オブザーバー C 1970～1980年頃の状態と比較するためには現在の精密な空撮が必要。知床岬だけではなく広域的に比較できる様なデータがあった方がいい。また、内陸部についても含めたデータベースを作ることが重要だと思う。
- 座長 植生図はシカに関してばかりではなく、ベースマップとして必要だ。実施の作業量、経費を算定してほしい。

- 委員 D 委員 B が言った様に、モニタリングできる場所を作って、植生の変化を把握することが必要。シカによる影響が顕著になってから調べるのではなく、植生変化のプロセスを初期段階から押さえておくことが必要。
- もうひとつ気になることがあり、海岸の急傾斜地でシカの高密度生息域では、土壌浸食が始まらないかどうかという点である。ここでは起きていないが、他の場所では起き始めている。海への影響も懸念される。その当たりも視野に入れる必要がある。
- 座長 次回、現場の写真があればみせて欲しい。
- 座長 管理計画の検討作業は具体的にどのように進めるのか。
- 小平（知床財団）環境省が提出した計画案策定の年次に基づいて議論を願いたい。次の WG までにどういう事項を決定する必要があるのか検討する。
- 座長 それでは、環境省配付資料 3p の実施予定内容の一覧表をたたき台にして検討作業の流れを確認したい。
- 小平（知床財団）午前中の議論をふまえてエゾシカ WG でいくつかのシナリオを想定し、それぞれに対応する対策の方向性を次回までくらいには考える必要がある。
- 委員 C メールでのやりとりも含めて議論を深め、第 2 回の検討会でいくつかのシナリオ案を出して集中討議し、骨組みを作ればよいのではないかと。
- 座長 今具体的な提案を頂いた。その中には石城委員が言った様な知床半島に関する生態系のデータも出していきたい。
- 委員 A 管理計画策定に必要なデータは今のうちに確定すべき。今日もある程度出たが、議事要旨作成の際には、必要なデータ項目についても一緒にまとめて頂きたい。
- また、次回には管理の目的についてもある程度案が固まっているべき。基本方針・計画の対象範囲も次回決めておくべきだと考える。
- 山中（知床財団）オブザーバー C にお問い合わせの内容を確認させて頂きたい。
- オブザーバー C 道東地域の植生については 1920 年のものがある。平成と現在のものが必要だ。粗いものであれば約 10 年前のものがある。
- 座長 今あるものでよいので、植生図はオブザーバー C が作成したものを提出願いたい。
- 委員 C 直接シカに関係ないが知床では植生調査も行われており（例：北大の

甲山氏による遠音別調査) そのあたりも整理する必要がある。それら資料のとりまとめを事務局にお願いしたい。

委員 B さきほど梶座長が言われた様に、植生図は科学委員会でもベース資料として必要なもの。その作成を誰がどのように、どこの委員会でやるのか整理する必要がある。

委員 A このエゾシカ保護管理計画は、エゾシカに関する道の特定鳥獣保護管理計画の一部とするのか。それとも世界遺産管理計画にもとづくものか？

鳥居（環境省） 国指定鳥獣保護区では、管理計画の策定は法的な位置づけはない。道の計画との整合性をとることは必要。

山中（知床財団） 国指定鳥獣保護区のマスタープランとの関係は？

鳥居（環境省） それを踏まえて世界自然遺産管理計画を作っている。

座長 計画の実行者はどのようになるのか？例えば岬で個体数管理をする場合は実行者は誰なのか。

鳥居（環境省） 国指定鳥獣保護区については環境省が実行主体となる。

座長 道の特定鳥獣保護管理計画の中に、知床の項目を入れ、その中身としては「環境省の管理計画に準拠する」という書き込みを行うことが考えられる。

委員 C 大台ヶ原の場合どのように調整したのか。

西野（環境省） 奈良県の特定計画の中では、大台ヶ原の部分については環境省の計画によると記されている。

座長 シナリオ案作りをどうするか意見が欲しい。また、それに使えるデータの整理についての意見が欲しい。

小平（知床財団） 知床岬以外の植生データで次回までに用意できるのは幌別地区の林野庁による森林保全事業のフェンスの調査データについてである。

山中（知床財団） 2回目の年度末の会議に何を決める必要があるのか、それまでに事務局サイドとして何を用意しておく必要があるのか議論して欲しい。それに沿ってタイムスケジュールを考えたい。

座長 今日の議論を踏まえていくつかシナリオを作る。次回はそれに基づいて議論する。

次に管理計画案の6W1Hを埋めていく必要がある。

次にモニタリングをする際どのようなデータを用いるのか整理する必要がある。

次に色々な調査項目が上がっているが、その優先順位、想定される予算規模と体制について用意して頂いて議論したい。

オブザーバーCにも資料を出してもらいたい。

この他に足りないところがあったらご意見頂きたい。

小野寺（林野庁）「基本方針」は具体的にどこまで書き込むか？例えば知床岬で個体数調整をるところまで書き込むことになるのか？森林生態系保護地域の中でそれが可能なのか。合意形成のあり方はどうするかなどで課題がある。

鳥居（環境省）まず、計画の対象範囲を決めなければならない。一番重要なのは「なぜ、何を」という部分。今回はこの2点は決めたい。

座長 知床半島全体となると保護制度の、土地利用の仕方が場所によって違う。ゾーニングに基づく、地域別管理が考えられる。どのようなシナリオを選ぶかによって、「なぜ、何を」が具体的にになる。

委員A 「なぜ」についても根拠となるデータがあった方がよい。その際は、科学的に確証しているもの、していないものを峻別して記載する。そしてその認識に立って「この自然をどう守るか」を考えると、当然複数の案が出る。ただその場合も、この知床の原生自然にあった生物多様性を守ろうという目的は変わらないだろうと思う。それについて検討するためにも、今はどういう状況にあるのかについて、あるいはシカの個体数の増減がかつてあったのか、無かったのかということについては、分かっている限りの知見をエゾシカWGが提供する必要がある。

座長 確認すると、シカの密度が高い、植生に対して大きな影響を与えているというのは共通認識であり、またそれが生物多様性に影響を与えてしまうのではないかという危機感も共通認識だ。その上で、「じゃあどうするのか」という部分で複数のシナリオ案が出てくると理解した。

岡田（知床財団）次回会議の際に、シナリオを絞り込むところまで行くのか？

委員C 選択肢の提示でよく、絞り込むのは必要ないし、出来ないと思う。

座長 最適な解はない。シナリオを提示して、どのシナリオがもっとも確からしいか、そして、どのようなシナリオをとる場合でも、植物を絶滅させない予防措置をどうするかという議論になると思う。

委員A 「植物を絶滅させない」と言い切るならば、自分の考えとしてはシカは捕るしかない。しかし世論は許すのか。「一種たりとも絶滅させない」

というのか、あるいは少し様子を見るのか。どちらを取るかは社会が決めることだと私は思う。

座長

その辺りのこともシナリオに入ると思う。先程も議論になったが、科学委員会、エゾシカ WG の判断と社会的な価値判断は分けておいた方がよいということだと思ふ。

以上で議論を終了したい。